校異源氏物語・あかし

なを雨風やます神なりしつまらて日ころになりぬいとゝ物わひしき事かすしらすきしかた行さきかなしき御ありさまに心つようしもえおほしなさすいかにせましかゝりとて都に帰らんこともまたよにゆるされもなくては人わらはれなることこそまさらめ猶これよりふかき山をもとめてやあとたえなましとおほすにも浪かせにさはかれてなと人のいひつたへん事後の世まていとかろ　くしき名やなかしはてんとおほしみたる夢にもたゝおなしさまなる物のみきつゝまつはしきこゆとみ給雲まなくてあけくるゝ日数にそへて京の方もいとゝおほつかなくかくなから身をはふらかしつるにやと心ほそうおほせとかしらさしいつへくもあらぬそらのみたれにいてたちまいる人もなし二条院よりそあなかちにあやしきすかたにてそをちまいれるみちかひにてたに人かなにそとたに御覧しわくへくもあらすまつをひはらひつへきしつのおのむつましう哀におほさるゝもわれなからかたしけなくゝしにける心のほと思ひしらる御文にあさましくをやみなきころのけしきにいとゝ空さへとつる心ちしてなかめやるかたなくなむ

　浦風やいかに吹らむおもひやる袖うちぬらし波まなきころ哀にかなしき事ともかきあつめ給へりいとゝみきはまさりぬへくかきくらす心ちし給京にもこの雨風あやしき物のさとしなりとて仁王会なとおこなはるへしとなむきこえ侍し内にまいり給かんたちめなともすへてみちとちてまつりこともたえてなむ侍なとはか　くしうもあらすかたくなしうかたりなせと京の方のことゝおほせはいふかしうて御まへにめしいてゝとはせ給たゝれいの雨のをやみなくふりて風は時　く吹いてて日ころになり侍をれいならぬことにおとろき侍なりいとかく地のそことほるはかりのひふりいかつちのしつまらぬことは侍らさりきなといみしきさまにおとろきおちてをるかほのいとからきにも心ほそさまさりけるかくしつゝ世はつきぬへきにやとおほさるゝにその又の日のあかつきより風いみしうふきしほたかうみちて浪のをとあらき事いはほも山ものこるましきけしきなり神のなりひらめくさまさらにいはむかたなくておちかゝりぬとおほゆるにあるかきりさかしき人なしわれはいかなるつみをゝかしてかくかなしき目をみるらむちゝはゝにもあひみすかなしきめこのかほをもみてしぬへきことゝなけ

く君は御心をしつめてなにはかりのあやまちにてかこのなきさに命をはきはめんとつようおほしなせといと物さはかしけれは色　くのみてくらさゝけさせ給て住吉の神ちかきさかひをしつめまもり給まことにあとをたれ給神ならはたすけ給へとおほくの大願をたて給をのをの身つからの命をはさる物にてかゝる御身のまたなきれいにしつみ給ぬへきことのいみしうかなしき心をゝこしてすこし物おほゆるかきりは身にかえてこの御身ひとつをすくいたてまつらむととよみてもろこゑに仏神を念したてまつる帝王のふかき宮にやしなはれ給て色色のたのしみにおこり給しかとふかき御うつくしみおほやしまにあまねくしつめるともからをこそおほくうかへ給しかいまなにのむくひにかこゝらよこさまなる浪風にはおほゝれ給はむ天地ことはり給へつみなくてつみにあたりつかさ位をとられ家をはなれさかひをさりて明くれやすきそらなくなけき給にかくかなしきめをさへみ命つきなんとするはさきの世のむくひか此世のをかしか神仏あきらかにましまさはこのうれへやすめ給へとみ社のかたにむきてさま　くの願をたて給又海のなかのりうわうよろつの神たちに願をたてさせ給にいよ　くなりとゝろきておはしますにつゝきたるらうにおちかゝりぬほのをもえあかりてらうはやけぬ心たましゐなくてあるかきりまとふうしろのかたなるおほゐとのとおほしき屋にうつしたてまつりてかみ下となくたちこみていとらうかはしくなきとよむ声いかつちにもをとらす空はすみをすりたるやうにて日も暮にけりやうやう風なをり雨のあしゝめり星の光もみゆるにこのおまし所のいとめつらかなるもいとかたしけなくてしん殿にかへしうつしたてまつらむとするにやけのこりたるかたもうとましけにそこらの人のふみとゝろかしまとへるにみすなともみなふきちらしてけり夜をあかしてこそはとたとりあへるに君は御ねんすし給ておほしめくらすにいと心あはたゝし月さしいてゝしほのちかくみちきけるあともあらはになこり猶よせ帰波あらきを柴の戸をしあけてなかめをはしますちかき世界に物の心をしりきしかた行さきのことうちおほえとやかくやとはかはかしうさとる人もなしあやしきあまともなとのたかき人おはする所とてあつまりまいりてきゝもしり給はぬことゝもをさえつりあへるもいとめつらかなれとえをひもはらはすこの風いましはしやまさらましかはしほのほりてのこる所なからまし神のたすけをろかならさりけりといふをきゝ給もいと心ほそしといへはをろか也

　海にます神のたすけにかゝらすはしほのやをあひにさすらへなましひねもすにいりもみつる神のさはきにさこそいへいたうこうし給にけれは心にもあら

すうちまとろみ給かたしけなきおまし所なれはたゝより居給へるに故院たゝおはしましゝさまなからたち給てなとかくあやしき所に物するそとて御てをとりてひきたて給住吉の神のみちひき給まゝにははやふなてしてこの浦をさりねとの給はすいとうれしくてかしこき御影にわかれたてまつりにしこなたさま　く
かなしき事のみおほく侍れはいまはこのなきさに身をやすて侍なましときこえ給へはいとあるましきことこれはたゝいさゝかなる物のむくひなり我は位にありし時あやまつことなかりしかとをのつからをかしありけれはそのつみをおふる程いとまなくてこの世をかへりみさりつれといみしきうれへにしつむをみるにたへかたくてうみにいりなきさにのほりいたくこうしにたれとかゝるついてに内裏にそうすへきことのあるによりなむいそきのほりぬるとてたちさり給ぬあかすかなしくて御ともにまいりなんとなきいり給てみあけ給へれは人もなく月のかほのみきら　くとして夢の心ちもせす御けはひとまれるこゝちして空の雲哀にたなひけり年比夢の内にもみたてまつらてこひしうおほつかなき御さまをほのかなれとさたかにみたてまつりつるのみ面かけにおほえ給て我かくかなしひをきはめ命つきなんとしつるをたすけにかけり給へると哀におほすによくそかゝるさはきもありけるとなこりたのもしうゝれしうおほえ給ことかきりなしむねつとふたかりて中　くなる御心まとひにうつゝのかなしきこともうち忘夢にも御いらへをいますこしきこえすなりぬることゝいふせさに又やみえ給ふとことさらにね入給へとさらに御めもあはてあか月かたに成にけりなきさにちいさやかなる舟よせて人二三人はかりこの旅の御やとりをさしてまいるなに人ならむとゝへは明石の浦よりさきのかみしほちの御ふねよそひてまいれる也源少納言さふらひ給はゝたいめして事の心とり申さんといふよしきよおとろきて入道はかの国のとくゐにて年ころあひかたらひ侍れとわたくしにいさゝかあひうらむること侍てことなるせうそこをたにかよはさてひさしうなり侍ぬるを浪のまきれにいかなることかあらむとおほめく君の御夢なともおほしあはすることもありてはやあへとの給へは舟にいきてあひたりさはかりはけしかりつる波かせにいつのまにかふなてしつらむと心えかたくおもへりいぬるついたちのひ夢にさまことなる物のつけしらすること侍しかはしむしかたき事とおもふ給へしかと十三日にあらたなるしるしみせむ舟よそひまうけてかならす雨風やまはこの浦にをよせよとかねてしめすことの侍しかは心みに舟のよそひをまうけてまち侍しにいかめしき雨風いかつちのおとろかし侍つれは人の御かとにも夢をしむして国をたすくるたくひおほう侍けるをもちゐさせ給はぬまてもこのいま

しめの日をすくさすこのよしをつけ申侍らんとて舟いたし侍つるにあやしき風
ほそう吹てこの浦につき侍ることまことに神のしるへたかはすなんこゝにも
ししろしめすことや侍つらんとてなむいとはゝかりおほく侍れとこのよし申給
へといふよしきよ忍やかにつたへ申君おほしまはすにゆめうつゝさま　くしつ
かならすさとしのやうなる事共をきしかた行末おほしあはせてよの人のきゝつ
たへん後のそしりもやすからさるへきをはゝかりてまことの神のたすけにもあ
らむをそむく物ならは又これよりまさりて人わらはれなるめをやみむうつゝさ
まの人の心たに猶くるしはかなきことをもつゝみて我よりよはひまさりもしは
位たかく時よのよせいま一きはまさる人にはなひきしたかひてその心むけをた
とるへき物なりけりしりそきてとかなしとこそ昔さかしき人もいひをきけれけ
にかく命をきはめよに又なきめのかきりをみつくしつさらにのちのあとの名を
はふくとてもたけき事もあらし夢の中にもちゝ御門の御をしへありつれは又な
にことかうたかはむとおほして御返の給しらぬせかいにめつらしきうれへのか
きりみつれと宮この方よりとてことゝひをこする人もなしたゝ行ゑなき空の月
日の光はかりを故郷の友となかめ侍にうれしきつり舟をなむかの浦にしつやか
にかくろふへきくま侍りなんやとの給かきりなくよろこひかしこまり申ともあ
れかくもあれ夜の明はてぬさきに御舟にたてまつれとてれいのしたしきかきり
四五人はかりしてたてまつりぬれいの風いてきてとふやうにあかしにつき給ぬ
たゝはひわたる程にかた時のまといへと猶あやしきまてみゆる風の心なりはま
のさまけにいと心ことなり人しけうみゆるのみなむ御ねかひにそむきける入道
のらうしめたる所　くうみのつらにも山かくれにもとき　くにつけてけふをさ
かすへきなきさのとまやおこなひをして後世のことを思ひすましつへき山みつ
のつらにいかめしきたうをたてゝ三昧をおこなひ此世のまうけに秋のたのみを
かりをさめのこりのよはひつむへきいねのくらまちともなとおり　く所につけ
たるみ所ありてしあつめたりたかしほにおちてこの比むすめなとはをかへのや
とにうつしてすませけれはこのはまのたちに心やすくおはします舟より御車に
たてまつりうつるほと日やう　くさしあかりてほのかにみたてまつるより老わ
すれよはひのふる心ちしてゑみさかへてまつ住吉の神をかつ　くおかみたてま
つる月日の光をてにえたてまつりたる心ちしていとなみつかうまつる事ことは
りなり所のさまをはさらにもいはすつくりなしたる心はへ木たちたていしせむ
さいなとのありさまえもいはぬ入江の水なとゑにかゝは心のいたりすくなから
んゑしはかきをよふましとみゆ月ころの御すまゐよりはこよなくあきらかにな

つかしき御しつらひなとえならすしてすまゐけるさまなとけに都のやむことなき所　くにことならすえむにまはゆきさまはまさりさまにそみゆるすこし御心しつまりては京の御文ともきこえ給まいれりし使はいまははいみしきみちにいてたちてかなしきめをみるとなきしつみてあのすまにとまりたるをめして身にあまれる物ともおほくたまひてつかはすむつましき御いのりのしともさるへき所　くにはこの程の御ありさまくはしくいひつかはすへし入道の宮はかりにはめつらかにてよみ帰さまなときこえ給二条院のあはれなりしほとの御かへりはかきもやり給はすうちをき　くをしのこひつゝきこえ給御けしき猶ことなり返ゝいみしきめのかきりをつくしはてつるありさまなれはいまはと世を思ひはなるゝ心のみまさり侍れとかゝみをみてもとの給し面かけのはなるゝよなきをかくおほつかななからやとこゝらかなしきさま　くのうれはしさはさしをかれて

　はるかにもおもひやるかなしらさりし浦よりをちにうらつたひして夢の内なる心ちのみしてさめはてぬほといかにひかことおほからむとけにそこはかとなくかきみたり給へるしもそいとみまほしきそはめなるをいとこよなき御心さしのほとゝ人　くみたてまつるをの　く故郷に心ほそけなることつてすへかめりをやみなかりし空のけしきなこりなくすみわたりてあさりするあまともほこらしけなりすまはいと心ほそくあまのいはやもまれなりしを人しけきいとひはし給しかとこゝは又さまことにあはれなることおほくてよろつにおほしなくさまるあかしの入道おこなひつとめたるさまいみしう思ひすましたるをたゝこのむすめひとりをもてわつらひたるけしきいとかたはらいたきまて時　くもらしうれへきこゆ御心ちにもおかしときゝをき給し人なれはかくおほえなくてめくりおはしたるもさるへき契あるにやとおほしなから猶かう身をしつめたる程はおこなひよりほかの事は思はし宮この人もたゝなるよりはいひしにたかふとおほさむも心はつかしうおほさるれはけしきたち給ことなしことにふれて心はせありさまなへてならすもありけるかなとゆかしうおほされぬにしもあらすこゝにはかしこまりてみつからもをさ　くまいらすものへたゝりたるしものやにさふらふさるはあけくれみたてまつらまほしうあかすおもひきこえておもふ心をかなへむと仏神をいよ　くねんしたてまつるとしは六十はかりになりたれといときよけにあらまほしうおこなひさらほひて人のほとのあてはかなれはにやあらむうちひかみほれ　くしきことはあれといにしへのことをもしりて物きたなからすよしつきたることもましれゝは昔物かたりなとせさせてきゝ給にすこし

つれ　くのまきれなりとし比おほやけわたくし御いとまなくてさしもきゝをき給はぬよのふることゝもくつしいてゝかゝる所をも人をもみさらましかはさう

　くしくやとまてけふありとおほす事もましるかうはなれきこゆれといとけたかう心はつかしき御ありさまにさこそいひしかつゝましうなりて我おもふことは心のまゝにもえうちいてきこえぬを心もとなうくちおしとはゝ君といひあはせてなけくさうしみはをしなへての人たにめやすきはみえぬせかいに世にはかゝる人もおはしけりとみたてまつりしにつけて身の程しられていとはるかにそ思ひきこえけるおやたちのかくおもひあつかふをきくにもにけなきことかなと思にたゝなるよりは物あはれなり四月になりぬ衣かへの御さうそく御丁のかたひらなとよしあるさまにしいてつゝよろつにつかうまつりいとなむをいとおしうすゝろなりとおほせと人さまのあくまて思あかりたるさまのあてなるにおほしゆるしてみ給京よりもうちしきりたる御とふらひともたゆみなくおほかりのとやかなる夕月夜にうみのうへくもりなくみえわたれるもすみなれ給し故郷の池水思ひまかへられ給にいはむかたなくこひしきことといつかたとなく行ゑなき心ちし給てたゝめのまへにみやらるゝはあはちしま成けりあはとはるかになとの給て

　あはとみるあはちのしまのあはれさへのこるくまなくすめるよの月ひさしうてふれ給はぬきむをふくろよりとりいて給てはかなくかきならし給へる御さまをみたてまつる人もやすからす哀にかなしうおもひあへりかうれうといふてをあるかきりひきすまし給へるにかのをかへの家も松のひゝき波の音にあひて心はせあるわか人は身にしみておもふへかめりなにともきゝわくましきこのもかのものしはふる人ともゝすゝろはしくてはま風をひきありく入道もえたへてくやう法たゆみていそきまいれりさらにそむきにし世の中もとりかへし思ひいてぬへく侍りのちの世にねかひ侍ところのありさまもおもふ給へやらるゝ夜のさまかなとなく　くめてきこゆ我御心にもおり　くの御あそひその人かの人のことふえもしはこゑのいてしさまに時　くにつけてよにめてられ給しありさまみかとよりはしめたてまつりてもてかしつきあかめたてまつり給しを人のうへも我御身のありさまもおほしいてられて夢の心ちし給まゝにかきならし給へるこゑも心すこくきこゆる人は涙もとゝめあへすをかへにひわ笙のことゝりにやりて入道ひわの法師になりていとおかしうめつらしきてひとつふたつひきたりさうの御ことまいりたれはすこしひき給もさま　くいみしうのみ思ひきこえたりいとさしもきこえぬ物のねたにおりからこそはまさるものなるをはる　くと

物のとゝこほりなき海つらなるに中　く春秋のはなもみちのさかりなるよりはたゝそこはかとなうしけれるかけともなまめかしきにくひなのうちたゝきたるはたか門さしてと哀におほゆねもいとになういつることゝもをいとなつかしうひきならしたるも御心とまりてこれは女のなつかしきさまにてしとけなうひきたるこそおかしけれと大方にの給を入道はあひなくうちゑみてあそはすよりなつかしきさまなるはいつこのか侍らんなにかし延喜の御てよりひきつたへたることしたいになんなり侍ぬるをかうつたなき身にてこの世のことはすてわすれ侍ぬるを物のせちにいふせきおり　くはかきならし侍しをあやしうまねふものゝ侍こそしねむにかのせむ大王の御てにかよひて侍れ山ふしのひかみゝにまつかせをきゝわたし侍にやあらんいかてこれもしのひてきこしめさせてしかなときこゆるまゝにうちわなゝきて涙おとすへかめり君ことをことも聞給ましかりけるあたりにねたきわさかなとてをしやり給にあやしう昔より笙は女なんひきとる物なりけるさかの御つたへにて女五の宮さる世のなかの上すに物し給けるをその御すちにてとりたてゝつたふる人なしすへてたゝいま世に名をとれる人　くかきなての心やりはかりにのみあるをこゝにかうひきこめ給へりけるいとけうありける事かないかてかはきくへきとの給きこしめさむにはなにのはゝかりか侍らんおまへにめしてもあき人のなかにてたにこそふることときゝはやす人は侍けれひわなむまことのねをひきしつむる人いにしへもかたう侍しをおさ　くとゝこほることなうなつかしきてなとすちことになんいかてたとるにか侍らんあらき浪のこゑにましるはかなしくもおもふ給へられなからかきつむる物なけかしさまきるゝおり　くも侍りなとすきゐたれはおかしとおほしてさうのこととりかへてたまはせたりけにいとすくしてかいひきたりいまの世にきこえぬすちひきつけてゝつかひいといたうからめきゆのねふかうすましたり伊勢の海ならねときよきなきさにかひやひろはむなとこゑよき人にうたはせてわれも時　く拍しとりてこゑうちそへ給をことひきさしつゝめてきこゆ御くた物なとめつらしきさまにてまいらせ人　くにさけしひそしなとしてをのつから物わすれしぬへき夜のさまなりいたく深行まゝにはま風すゝしうて月もいりかたになるまゝにすみまさりしつかなるほとに御物語のこりなくきこえてこの浦にすみはしめしほとの心つかひ後の世をつとむるさまかきくつしきこえてこのむすめのありさまとはすかたりにきこゆおかしきものゝさすかにあはれときゝ給ふしもありいとゝり申かたき事なれとわかきみかうおほえなきせかいにかりにてもうつろひおはしましたるはもしとしころおいほうしのいのり申侍神仏のあはれ

ひおはしましてしはしのほと御心をもなやましたてまつるにやとなんおもふたまふるそのゆゑはすみよしのかみをたのみはしめたてまつりてこの十八ねんになり侍ぬめのわらはいときなう侍しよりおもふ心侍てとしことの春秋ことにかならすかの御やしろにまいることなむ侍ひるよるの六時のつとめにみつからのはちすのうへのねかひをはさるものにてたゝこの人をたかきほいかなへたまへとなんねんし侍さきのよのちきりつたなくてこそかくゝちおしき山かつとなり侍けめをや大臣のくらゐをたもちたまへりきみつからかくゐなかのたみとなりにて侍りつき　くさのみおとりまからはなにの身にかなり侍らんとかなしく思侍をこれはむまれしときよりたのむところなん侍いかにして宮このたかき人にたてまつらんと思ふ心ふかきによりほと　くにつけてあまたのひとのそねみをおひみのためからきめをみるをり　くもおほく侍れとさらにくるしみとおもひ侍らす命のかきりはせはき衣にもはくゝみ侍なむかくなからみすて侍なは浪のなかにもましりうせねとなんをきて侍なとすへてまねふへくもあらぬことゝもをうちなきうちなきゝこゆ君も物をさま　くおほしつゝくるおりからはうち涙くみつゝきこしめすよこさまのつみにあたりて思ひかけぬせかいにたゝよふもなにのつみにかとおほつかなく思ひつるこよひの御物かたりにきゝあはすれはけにあさからぬさきの世のちきりにこそはと哀になむなとかはかくさたかに思ひしり給けることをいまゝてはつけ給はさりつらむ都はなれし時より世のつねなきもあちきなうおこなひよりほかの事なくて月日をふるに心もみなくつをれにけりかゝる人物し給とはほのきゝなからいたつら人をはゆゝしき物にこそおもひすて給らめと思ひくしつるをさらはみちひき給へきにこそあなれ心ほそきひとりねのなくさめにもなとの給をかきりなくうれしと思へり

　ひとりねは君もしりぬやつれ　くと思ひあかしのうらさひしさをまして年月おもひ給へわたるいふせさをゝしはからせ給へときこゆるけはひうちわなゝきたれとさすかにゆへなからすされとうらなれ給へらむ人はとて

　たひころもうらかなしさにあかしかね草の枕は夢もむすはすとうちみたれ給へる御さまはいとそあいきやうつきいふよしなき御けはひなる数しらぬ事ともきこえつくしたれとうるさしやひかことゝもにかきなしたれはいとゝをこにかたくなしき入道の心はへもあらはれぬへかめりおもふことかつ　くかなひぬる心ちしてすゝしう思ひゐたるに又の日のひるつかたをかへに御文つかはす心はつかしきさまなめるも中　くかゝる物のくまにそ思ひのほかなることもこもるへかめると心つかひし給てこまのくるみ色のかみにえならすひきつくろひて

をちこちもしらぬ雲ゐになかめわひかすめしやとの木すゑをそとふおもふ
にはとはかりやありけん入道も人しれすまちきこゆとてかの家にきゐたりける
もしるけれは御つかひいとまはゆきまてゑはす御返いとひさしうちにいりてそ
ゝのかせとむすめはさらにきかすはつかしけなる御文のさまにさしいてむてつ
きもはつかしうつゝまし人の御程我身のほと思にこよなくて心ちあしとてより
ふしぬいひわひて入道そかくいとかしこきはゐなかひて侍るたもとにつゝみあ
まりぬるにやさらにみたまへもをよひ侍らぬかしこさになんさるは

なかむらんおなし雲ゐをなかむるは思ひもおなし思ひなるらむとなんみ給
るいとすき　くしやときこえたりみちのくにかみにいたうふるめきたれとかき
さまよしはみたりけにもすきたるかなとめさましうみ給御つかひになへてなら
ぬたまもなとかつけたり又の日せんしかきはみしらすなんとて

いふせくもこゝろにものをなやむかなやよやいかにとゝふ人もなみいひか
たみとこのたひはいといたうなよひたるうすやうにいとうつくしけにかきたま
へりわかき人のめてさらむもいとあまりむもれいたからむめてたしとはみれと
なすらひならぬ身の程のいみしうかひなけれは中　く世にあるものとたつねし
り給につけて涙くまれてさらにれいのとうなきをせめていはれてあさからすし
めたるむらさきのかみにすみつきこくうすくまきらはして

おもふらんこゝろのほとやゝよいかにまたみぬ人のきゝかなやまむてのさ
まかきたるさまなとやむことなき人にいたうをとるましう上すめきたり京のこ
とおほえておかしとみ給へとうちしきりてつかはさむも人めつゝましけれは二
三日へたてつゝつれ　くなる夕くれもしは物あはれなる明ほのなとやうにまき
らはしており　くおなし心にみしりぬへき程をしはかりてかきかはし給ににけ
なからす心ふかう思ひあかりたるけしきもみてはやましとおほす物からよしき
よからうしていひしけしきもめさましう年比心つけてあらむをめのまへに思ひ
たかへんもいとおしうおほしめくらされて人すゝみまいらはさるかたにてもま
きらはしてんとおほせと女はた中　くやむことなきゝはの人よりもいたう思ひ
あかりてねたけにもてなしきこえたれは心くらへにてそすきける京のことをか
く関へたゝりてはいよ　くおほつかなく思ひきこえ給ていかにせましたはふれ
にくゝもあるかなしのひてやむかへたてまつりてましとおほしよはるをり　く
あれとさりともかくてやはとしをかさねんといまさらに人わろき事をはとおほ
ししつめたりそのとしおほやけにものゝさとししきりて物さはかしき事おほか
り三月十三日かみなりひらめき雨風さはかしき夜みかとの御夢に院の御門御ま

へのみはしのもとにたゝせ給て御けしきいとあしうてにらみきこえさせ給をかしこまりておはしますきこえさせ給こともおほかり源氏の御事なりけんかしいとおそろしういとおしとおほしてきさきにきこえさせ給けれは雨なとふり空みたれたる夜は思なしなることはさそ侍るかろ　くしきやうにおほしおとろくましきことゝきこえ給にらみ給しにめみあはせ給とみしけにや御めわつらひ給てたへかたうなやみ給御つゝしみ内にも宮にもかきりなくせさせ給おほきおとゝうせ給ぬことはりの御よはひなれとつき　くにをのつからさはかしきことあるに大宮もそこはかとなうわつらひ給て程ふれはよはり給やうなる内におほしなけくことさま　くなりなを此源氏の君まことにおかしなきにてかくしつむならはかならすこのむくひありなんとなむおほえ侍いまは猶もとのくらゐをもたまひてむとたひ　くおほしの給を世のもときかろ　くしきやうなるへしつみにおちて都をさりし人を三ねんをたにすくさすゆるされむことはよの人もいかゝいひつたへ侍らんなときさきかたくいさめ給におほしはゝかるほとに月日かさなりて御なやみともさま　くにをもりまさらせ給あかしにはれいの秋浜風のことなるにひとりねもまめやかに物わひしうて入道にもおり　くかたらはせ給とかくまきらはしてこちまいらせよとのたまいてわたり給はむことをはあるましうおほしたるをさうしみはたさらに思たつへくもあらすいとくちおしきゝはのみ中人こそかりにくたりたる人のうちとけことにつきてさやうにかろらかにかたらふわさをもすなれ人数にもおほされさらん物ゆへわれはいみしき物思ひをやそへんかくをよひなき心をおもへるおやたちもよこもりてすくす年月こそあいなたのみに行する心にくゝ思らめ中　くなる心をやつくさむと思ひてたゝこの浦にをはせん程かゝる御文はかりをきこえかはさむこそをろかならね年比をとにのみ聞ていつかはさる人の御ありさまをほのかにもみたてまつらんなと思ひかけさりし御すまゐにてまほならねとほのかにもみたてまつりよになき物ときゝつたへし御ことのねをも風につけてきゝ明くれの御ありさまおほつかなからてかくまてよにある物とおほしたつぬるなとこそかゝるあまのなかにくちぬる身にあまることなれなとおもふにいよ　くはつかしうて露もけちかきことは思ひよらすおやたちはこゝらの年比のいのりのかなふへきを思ひなからゆくりかにみせたてまつりておほし数まへさらん時いかなるなけきをかせんと思やるにゆゝしくてめてたき人ときこゆともつらういみしうもあるへき哉めにもみえぬ仏神をたのみたてまつりて人の御心をもすくせをもしらてなとうちかへし思ひみたれたり君はこの比の波のをとにかの物のねをきかはやさらすはかひなくこ

そなとつねはの給しのひてよろしき日みてはゝ君のとかく思ひわつらふをきゝいれすてしともなとにたにしらせす心ひとつにたちゐかゝやくはかりしつらひて十三日の月の花やかにさしいてたるにたゝあたら夜のときこえたり君はすきのさまやとおほせと御なをしたてまつりひきつくろひて夜ふかしていて給御くるまはになくつくりたれと所せしとて御むまにて出給これみつなとはかりをさふらはせ給やゝとをくいる所なりけりみちの程もよもの浦　くみわたし給ておもふとちみまほしき入江の月影にもまつこひしき人の御事を思ひ出きこえ給にやかてむまひきすきておもむきぬへくおほす

秋のよの月けのこまよわかこふる雲ゐをかけれときのまもみんとうちひとりこたれ給つくれるさまこふかくいたき所まさりて見所あるすまゐなりうみのつらはいかめしうおもしろくこれは心ほそくすみたるさまこゝにゐて思ひのこすことはあらしとおほしやらるゝに物哀なり三味たうちかくてかねの声松かせにひゝきあひて物かなしういはにおひたる松の根さしも心はへあるさまなり前栽ともに虫のこゑをつくしたりこゝかしこのありさまなと御覧すむすめすませたる方は心ことにみかきて月いれたるま木の戸くちけしきはかりをしあけたりうちやすらひなにかとの給にもかうまてはみえたてまつらしとふかう思に物なけかしうてうちとけぬ心さまをことなうも人めきたるかなさしもあるましききはの人たちにかはかりいひよりぬれは心つようしもあらすならひたりしをいとかくやつれたるにあなつらはしきにやとねたうさま　くにおほしなやめりなさけなうをしたゝむもことのさまにたかへり心くらへにまけんこそ人わろけれなとみたれうらみ給さまけに物思ひしらむ人にこそみせまほしけれちかき木丁のひもにさうのことのひきならされたるもけはひしとけなくうちとけなからかきまさくりける程みえておかしけれはこのきゝならしたることをさへやなとよろつにのたまふ

むつことをかたりあはせむ人もかなうき世の夢もなかはさむやと

あけぬ夜にやかてまとへる心にはいつれを夢とわきてかたらむほのかなるけはひ伊勢のみやす所にいとようおほえたりなに心もなくうちとけてゐたりけるをかう物おほえぬにいとわりなくてちかゝりけるさうしのうちに入ていかてかためけるにかいとつよきをしゐてもをしたち給はぬさまなりされとさのみもいかてかあらむ人さまいとあてにそひへて心はつかしきけはひそしたるかうあなかちなりける契をおほすにもあさからすあはれなり御心さしのちかまさりするなるへしつねはいとはしき夜のなかさもとく明ぬる心ちすれは人にしられし

とおほすも心あはたゝしうてこまかにかたらひをきていて給ぬ御文いとしのひてそけふはあるあひなき御心のおになりやこゝにもかゝることいかてもらさしとつゝみて御つかひことことしうもゝてなさぬをむねいたくおもへりかくて後はしのひつゝ時　くおはす程もすこしはなれたるにをのつから物いひさかなきあまのこもやたちましらんとおほしはゝかる程をされはよと思ひなけきたるをけにいかならむと入道も極楽のねかひをは忘てたゝこの御けしきをまつことにはすいまさらに心をみたるもいと　くおしけなり二条の君の風のつてにももりきゝ給はむ事はたはふれにても心のへたてありけると思うとまれたてまつらんこゝろくるしうはつかしうおほさるゝもあなかちなる御心さしのほとなりかしかゝる方のことをはさすかに心とゝめてうらみ給へりしおり　くなとてあやなきすさひことにつけてもさ思はれたてまつりけむなとゝりかへさまほしう人のありさまをみ給につけてもこひしさのなくさむかたなけれはれいよりも御文こまやかにかき給てまことやわれなから心よりほかなる猶さりことにてうとまれたてまつりしふし　くを思出さへむねいたきに又あやしうものはかなき夢をこそみ侍しかゝうきこゆるとはすかたりにへたてなき心の程はおほしあはせよちかひしこともなとかきてなにことにつけても

しほ　くとまつそなかるゝかりそめのみるめはあまのすさひなれともとある御返なに心なくらうたけにかきて忍ひかねたる御夢かたりにつけても思ひあはせらるゝことおほかるを

うらなくも思ひけるかなちきりしを松より波はこえし物そとおひらかなる物からたゝならすかすめ給へるをいと哀にうちをきかたくみ給てなこりひさしうしのひの旅ねもし給はす女思しもしるきにいまそまことに身もなけつへき心ちする行すゑみしかけなるおやはかりをたのもしき物にていつの世に人なみ

くになるへき身と思はさりしかとたゝそこはかとなくてすくしつるとし月はなにことをか心をもなやましけむかういみしう物思はしき世にこそありけれとかねてをしはかり思ひしよりもよろつにかなしけれとなたらかにもてなしてにくからぬさまにみえたてまつるあはれとは月日にそへておほしませとやむことなきかたのおほつかなくて年月をすくし給ひたゝならすうち思ひをこせ給らむかいと心くるしけれはひとりふしかちにてすくし給ゑをさまさまかきあつめて思ことゝもをかきつけ返ことくへきさまにしなし給へりみむ人の心にしみぬへき物のさまなりいかてか空にかよふ御心ならむ二条の君も物あはれになくさむ方なくおほえ給おり　くおなしやうにゑをかきあつめ給つゝやかて我御あり

さまにきのやうにかき給へりいかなるへき御さまともにかあらむ年かはりぬ内に御くすりのことありて世中さま　くにのゝしるたうたいの御こは右大臣のむすめ承香殿の女御の御はらにおとこみこむまれ給へる二になり給へはいといはけなし春宮にこそはゆつりきこえ給はめおほやけの御うしろみをし世をまつりこつへき人をおほしめくらすにこの源氏のかくしつみ給こといとあたらしうあるましきことなれはつゐに后の御いさめをそむきてゆるされ給へきさためいてきぬこそより后も御物のけなやみ給いさま　くの物のさとしゝきりさはかしきをいみしき御つゝしみともをし給しるしにやよろしうおはしましける御めのなやみさへこの比をもくならせ給て物心ほそくおほされけれは七月廿よ日の程に又かさねて京へかへり給へき宣旨くたるつゐのことゝおもひしかとよのつねなきにつけてもいかになりはつへきにかとなけき給をかうにはかなれはうれしきにそへても又この浦を今はと思はなれむことをおほしなけくに入道さるへき事と思ひなからうちきくよりむねふたかりておほゆれと思ひのことさかへ給はゝこそは我おもひのかなふにはあらめなと思ひなをすそのころはよかれなくかたらひ給六月はかりより心くるしきけしきありてなやみけりかくわかれ給へきほとなれはあやにくなるにやありけむありしよりも哀におほしてあやしう物思へき身にも有けるかなとおほしみたる女はさらにもいはすおもひしつみたりいとことはりなりや思ひのほかにかなしきみちにいてたち給しかとつゐには行めくりきなむとかつはおほしなくさめきこのたひはうれしき方の御いてたちの又やは帰みるへきとおほすにあはれなりさふらふ人　くほと　くにつけてはよろこひおもふ京よりも御むかへに人　くまいり心地よけなるをあるしの入道涙にくれて月もたちぬ程さへ哀なる空のけしきになそや心つから今も昔もすゝろなる事にて身をはふらかすらむとさま　くにおほしみたれたるを心しれる人　くはあなにくれいの御くせそとみたてまつりむつかるめり月ころは露人にけしきみせす時　くはひまきれなとし給へるつれなさをこの比あやにくに中　くの人の心つくしにかとつきしろふ少納言しるへしてきこえいてしはしめの事なとさゝめきあへるをたゝならすおもへりあさてはかりに成てれいのやうにいたくもふかさてわたり給へりさやかにもまたみたまはぬかたちなといとよし　くしうけたかきさましてめさましうもありけるかなとみすてかたくゝちをしうおほさるさるへきさまにしてむかへむとおほしなりぬさやうにそかたらひなくさめ給おとこの御かたちありさまはたさらにもいはすとしころの御おこなひにいたくおもやせ給へるしもいふかたなくめてたき御ありさまにて心くるしけなるけしき

にうち涙くみつゝあはれふかく契給へるはたゝかはかりをさいはひにてもなとかやまさらむとまてそみゆめれとめてたきにしも我身の程をおもふもつきせす波の声秋の風には猶ひゝきことなり塩やく煙かすかにたなひきてとりあつめたる所のさまなり

　このたひはたちわかるともゝしほやくけふりはおなしかたになひかむとのたまへは

　かきつめてあまのたくものおもひにもいまはかひなきうらみたにせし哀にうちなきてことすくなゝる物からさるへきふしの御いらへなとあさからすきこゆこのつねにゆかしかり給物のねなとさらにきかせたてまつらさりつるをいみしううらみ給さらはかたみにもしのふはかりの一ことをたにとの給て京よりもてをはしたりしきんの御ことゝりにつかはして心ことなるしらへをほのかにかきならし給へるふかき夜のすめるはたとへんかたなし入道えたへてさうのことりてさしいれたり身つからもいとゝ涙さへそゝのかされてとゝむへきかたなきにさそはるゝなるへしゝのひやかにしらへたる程いと上すめきたり入道の宮の御こととのねをたゝいまの又なき物に思ひきこえたるはいまめかしうあなめてたときく人の心ゆきてかたちさへ思やらるゝことはけにいとかきりなき御ことのねなりこれはあくまてひきすまし心にくゝねたきねそまされるこの御心にたにはしめてあはれになつかしうまたみゝなれ給はぬてなと心やましきほとにひきさしつゝあかすおほさるゝにも月ころなとしみても聞ならささりつらむとくやしうおほさる心のかきり行さきの契をのみし給きんは又かきあはするまてのかたみにとのたまふおんな

　猶さりにたのめをくめるひとことをつきせぬねにやかけてしのはんいふともなきくちすさひをうらみ給て

　あふまてのかたみにちきる中のをのしらへはことにかはらさらなむこのねたかはぬさきにかならすあひみむとたのめ給めりされとたゝわかれむ程のわりなさをおもひむせたるもいとことはりなりたち給あか月は夜ふかくいて給て御むかへの人　くもさはかしけれは心も空なれと人まをはからひて

　うちすてゝたつもかなしきうら波のなこりいかにと思ひやるかな御返

　年へつるとまやもあれてうき波のかへるかたにや身をたくへましとうち思ひけるまゝなるをみ給にしのひ給へとほろ　くとこほれぬ心しらぬ人　くは猶かゝる御すまひなれとゝしころといふはかりなれ給へるをいまはとおほすはさもあることそかしなとみたてまつるよしきよなとはをろかならすおほすなむめ

りかしとにくゝそ思うれしきにもけにけふをかきりにこのなきさをわかるゝこ
となと哀かりてくち　くしほたれいひあへる事ともあめりされとなにかはとて
なむ入道けふの御まうけいといかめしうつかうまつれり人ゝしものしなまて旅
のさうそくめつらしきさまなりいつのまにかしあへけむとみえたり御よそひは
いふへくもあらすみそひつあまたかけたまはすまことの都のつとにしつへき御
をくり物ともゆへつきて思ひよらぬくまなしけふたてまつるへきかりの御さう
そくに
　よる波にたちかさねたるたひ衣しほとけしとや人のいとはむとあるを御覧
しつけてさはかしけれと
　かたみにそかふへかりけるあふことの日かすへたてん中のころもをとて心
さしあるをとてたてまつりかふ御身になれたるともをつかはすけにいまひとへ
しのはれ給へきことをそふる形見なめりえならぬ御そにゝほひのうつりたるを
いかゝ人の心にもしめさらむ入道いまはと世をはなれ侍にし身なれともけふの
御をくりにつかうまつらぬことなと申てかひをつくるもいとをしなからわかき
人はわらひぬへし
　よをうみにこゝらしほしむ身と成て猶このきしをえこそはなれね心のやみ
はいとゝまとひぬへく侍れはさかひまてたにときこえてすき　くしきさまなれ
とおほしいてさせ給おり侍らはなと御けしき給はるいみしう物を哀とおほして
所　くうちあかみ給へる御まみのわたりなといはむかたなくみえ給思ひすてか
たきすちもあめれはいまいとゝくみなをし給てむたゝこのすみかこそみすてか
たけれいかゝすへきとて
　宮こいてし春のなけきにおとらめやとしふる浦をわかれぬる秋とてをしの
こひ給へるにいとゝ物おほえすしほたれまさるたちゐもあさましうよろほふさ
うしみの心ちたとふへきかたなくてかうしも人にみえしと思ひしつむれと身の
うきをもとにてわりなきことなれとうちすて給へるうらみのやるかたなきにた
けきことゝはたゝ涙にしつめりはゝ君もなくさめわひてはなにゝかく心つくし
なることを思ひそめけむすへてひか　くしき人にしたかひける心のをこたりそ
といふあなかまやおほしすつましきことも物し給めれはさりともおほすところ
あらむ思なくさめて御ゆなとをたにまいれあなゆゝしやとてかたすみにより居
たりめのと母君なとひかめる心をいひあはせつゝいつしかいかておもふさまに
てみたてまつらむと年月をたのみすくしいまや思かなふとこそたのみきこえつ
れ心くるしき事をも物はしめにみるかなとなけくをみるにもいとおしけれはい

とゝほけられてひるは日ゝとひいをのみねくらしよるはすくよかにおきゐてすゝの行ゐもしらすなりにけりとててをゝしすりてあふきゐたりてしともにあはめられて月夜にいてゝ行道するものはやり水にたふれ入にけりよしあるいはのかたそはにこしもつきそこなひてやみふしたる程になんすこし物まきれける君はなにはのかたにわたりて御はらへし給て住吉にもたいらかにて色　くの願はたし申へきよし御つかひして申させ給にはかに所せうてみつからはこのたひえまうて給はすことなる御せうえうなとなくていそきいり給ぬ二条院におはしましつきて宮この人も御との人も夢の心ちしてゆきあひよろこひなきともゆゝしきまてたちさはきたり女君もかひなき物におほしすてつる命うれしうおほさるらむかしいとうつくしけにねひとゝのほりて御物思ひのほとに所せかりし御くしのすこしへかれたるしもいみしうめてたきをいまはかくてみるへきそかしと御心おちゐるにつけては又かのあかすわかれし人のおもへりしさま心くるしうおほしやらる猶よとゝもにかゝるかたにて御心のいとまそなきやその人のことゝもなときこえいて給へりおほしいてたる御けしきあさからすみゆるをたゝならすやみたてまつり給らんわさとならす身をは思はすなとほのめかし給そをかしうらうたくおもひきこえ給かつみるにたにあかぬ御さまをいかてへたてつる年月そとあさましきまておもほすにとりかへし世中もいとうらめしうなんほともなくもとの御位あらたまりて数よりほかの権大納言になり給つき　くの人もさるへきかきりはもとのつかさ返し給はり世にゆるさるゝほとかれたりし木の春にあへる心ちしていとめてたけなりめしありて内にまいり給御前にさふらひ給にねひまさりてゝかてさる物むつかしきすまゐにとしへ給つらむとみたてまつる女房なとの院の御時さふらひて老しらへるともはかなしくていまさらになきさはきめてきこゆうへもはつかしうさへおほしめされて御よそひなとことにひきつくろひていておはします御心ちれいならて日ころへさせ給けれはいたうおとろへさせ給へるを昨日けふそすこしよろしうおほされける御物かたりしめやかにありて夜に入ぬ十五夜の月おもしろうしつかなるにむかしのことかきつくしおほしいてられてしほたれさせ給物心ほそくをほさるゝなるへしあそひなともせす昔きゝし物のねなともきかて久うなりにけるかなとのたまはするに

わたつ海にしなへうらふれひるのこのあしたゝさりし年はへにけりときこえ給へりいとあはれに心はつかしうおほされて

宮はしらめくりあひけるときしあれはわかれし春のうらみのこすないとなまめかしき御ありさまなり院の御ために八講おこなはるへきことまついそかせ

給春宮をみたてまつり給にこよなくおよすけさせ給てめつらしうおほしよろこひたるをかきりなく哀とみたてまつり給御さへもこよなくまさらせ給て世をたもたせ給はむにはゝかりあるましくかしこくみえさせたまふ入道の宮にも御心すこしゝつめて御たいめんの程にも哀なる事ともあらむかしまことやかのあかしにはかへる浪に御文つかはすひきかくしてこまやかにかき給めり波のよる

くいかに

なけきつゝあかしの浦にあさ霧のたつやと人を思ひやるかなかのそちのむすめ五節あいなく人しれぬ物おもひさめぬる心ちしてまくなきつくらせてさしをかせけり

すまの浦に心をよせしふな人のやかてくたせる袖をみせはやてなとこよなくまさりにけりとみおほせ給てつかはす

帰てはかことやせましよせたりしなこりに袖のひかたかりしをあかすをかしとおほししなこりなれはおとろかされ給ていとゝおほしいつれとこの比はさやうの御ふるまひさらにつゝみ給めり花ちるさとなとにもたゝ御せうそこなとはかりにておほつかなく中　くうらめしけなり